

93 ひかげどうひやくばんかんのんのもくぞう 日影堂百番観音木像



指 定 市有形文化財 平成9年4月1日
 所在地 白 田
 所有者 医 王 寺



この観音木像は、江戸時代中期ころ、全国的に盛んであった観音霊場巡りによる観音信仰を母体として寄進されたものである。

当初は、大型（高さ約70cm）の聖観音を含めての七観音と、小型（高さ約40cm）の聖観音を含めて、百番観音が観音堂に安置された。

寺史によると、107体の観音像が完備されたのは、「寛保四甲子孟春、医王寺住持密菴代」で、願主は「井出勘右衛門・道心秀善」となっている。大型の七観音については、徳隆居士と銘のある聖観音をはじめとして、井出七太夫の千手観音、他5人のそれぞれの観音種別が明記されている。この寄進は元禄5年（1692）である。

百番観音については、その内訳が、西国三十三番、坂東三十三番、秩父三十四番となっている。寄進当時はそれぞれの観音について、寄進者それぞれにより記名・記入されたが（台座への記名、胎内銘への記入）、現在は一部を除いては判別できない。判別できる一部には「白田村・念仏講女中、坂東一番鎌倉杉本寺」があり、これは十一面観音である。

また、「白田村・山下太右衛門、坂東三番鎌倉安養院」「川上原村・新海新左衛門、筑波山大御堂」は、何れも千手観音である。この百番観音の寄進者は、佐久全域をはじめとして、県内・県外にわたっている。

当初、107体の観音像が寄進されたが、現存しているのは84体である。観音像の寄進がされた江戸中期の元禄時代より寛保時代の頃は、観音霊場巡りをする観音講が盛んのようなであった。この時期、佐久においても観音講は盛んであった。

百番観音の制作者については不明であるが、制作上の技法、品格においても極めて優れていることから、当時、高水準にあった仏師によって制作されたことが推察される。